

昔むかし、あるところに、貧しい兄弟がいました。あるとき、食べる物がなくなつたので、兄さんが働きに出ることになりました。弟は家に残つて家の仕事をしました。

兄さんは、遠い国まで出かけて行つて、ある金持ちの家で、召使いとしてやとつてもらいました。兄さんは、春まで働く約束をしました。主人は、兄さんにひとつの条件を出しました。

「春までのあいだに、おまえかわしか、どちらか先に腹を立てたほうが、金を支払うことにしよう。おまえが腹を立てたら、わしに千ルーブル支払うんだ。もしわしが腹を立てたら、おまえに千ルーブル支払おう」

兄さんは、

「でも、わたしは千ルーブルなんて持っていないから、そんな約束はできません」といいました。すると、主人は、

「いや、気にすることはない。金がなければ、かわりに十年間、給料なしで働いてくれればいいんだ」といいました。兄さんは、

（どんなことがあつても、ぼくが腹を立てることはないだろう。でも、あの主人は、きつといつかは怒るに違いない。そうしたら、ぼくは千ルーブルもらえるんだ）と考えました。そして、主人の申し出を承知しました。

次の朝、主人は、

「さあ、かまを持つて早く牧草地に行くんだ。明るいいいだは、せつせと草をかつて、暗くなるまで働くんぞ」といつて、兄さんを追い出しました。

兄さんは、一日じゅう草かりをして、夕方、疲れて帰つて来ました。すると、主人が、

「どうして、帰つて来たんだ」とききました。兄さんは、

「だって、お日さまはとくにしずんでしまいましたよ」と答えました。主人は、

「そうはいかん。『明るいいいだ草をかるように』といったはずだ。お日さまはしずんだが、お月さまが昇つて来たじゃないか。月の光だつて明るいぞ」といいました。

「なんですつて。じゃあ、ぜんぜん休むひまがないんですか」

「そら、おまえは、今、腹を立てただろう」

「いえ、腹など立てていません。ただ、とても疲れているから、休みたいと思つて」

兄さんは、また牧草地に出かけて行つて、お月さまがしずむまで草をかりました。そして、お日さまが昇るまでのわずかのあいだ、草の中に横になつて休みました。兄さんは、小さな声で、

「あいつの畑もパンもお金も、みんなのろわれてしまえ」とさげびました。そのとたん、まるで地面の中から飛び出してきたように、主人があらわれました。

「さあ、おまえは怒っているな。千ルーブル払うか、それとも十年間、給料なしで働くか、どっちだ」

兄さんはびつくりして、困り果てました。そして、千ルーブル払うのを少し待つてもらつて、家に逃げ帰りました。

家に着くと、弟が、

「どうだった」とたずねました。

「ぼくが腹を立てたばかりに、千ルーブルも借金してしまつたんだ」と、兄さんは、金持ちの主人が出した条件のことを話しました。それを聞くと、弟はいいました。

「そんなに悲しむことはないさ。こんどは、ぼくが、その金持ちの所に行つて、やとつ

てもらうよ」

弟は、出かけて行って、あの金持ちの所で召使いとしてやとってもらいました。主人は、

「春までのあいだに、おまえかわしか、どちらか先に腹を立てたほうが、金を支払うことにしよう。おまえが腹を立てたら、わしに千ルーブル支払うんだ。もしわしが腹を立てたら、おまえに千ルーブル支払おう」といいました。弟は、

「いや、それでは少なすぎます。先に腹を立てたほうが、二千ルーブル払うことにしましょう。ただし、わたしは二千ルーブル持っていないので、かわりに二十年間、給料なしで働きましょう」といいました。主人はよろこんで承知しました。

次の朝、お日さまは高く昇ったのに、弟は起きて来ません。

「早く起きろ、もうすぐ昼だぞ。いつまで眠っているんだ」

主人は弟をどなりつけました。

「おや、何をそんなに怒っているんですか」

「あ、いや。別に怒っているわけじゃないんだ。ただ、もう仕事に行く時間だって、いたかっただけだ」

だいたいふたつてから、弟は起き出して、ゆっくり長ぐつをはき始めました。

「早くしないか。何をぐずぐずしているんだ」

「おや、あなた、怒っていますね」

「いやいや、怒ってるんじゃない。ただ、仕事におくれるぞって、いたかっただけだ」

ところが、出かける支度ができないうちに、お昼になってしまいました。弟は、

「これから仕事に行ってもあまりはかどりませんよ。まずお昼ご飯を食べましょう」といいました。

食事がすむと、弟は、牧草地へ出かけて行きました。そして、

「さあ、からだをすりへらして働くんだから、少しは休んで、力をつけておかなくちゃ」

といって、草の上に寝転んで、そのまま眠ってしまいました。

夕方、主人が様子を見に来ると、草は少しもかり取られていません。

「なんて恥知らずなんだ。よそはみなすっかり草かりを終えたのに。もう暗くなってしまわないか」

主人は、大声でどなりながら、弟をやり起こしました。

「おや、あなた、ひよつとして、怒っていますね」

「いやいや、怒ってるんじゃない。ただ、暗くなったから、うちへ帰る時間だといっているだけだ」

「それならいいんですよ」

ふたりが家に帰ると、お客が来ていました。そこで、主人は、弟に、

「ひつじ小屋に行つて、夕飯にするひつじを殺して来ておくれ」といいました。

「どのひつじを殺しましょう」

「どれでもいいから、つかまえたひつじを殺せばいいんだ」

しばらくすると、近所の人がかけこんで来て、主人にいました。

「あなたの召使いが、ひつじをつぎつぎに殺しているよ。もう一頭も残っていない」

主人は、あわてて、ひつじ小屋に飛んで行きました。ひつじは、ぜんぶ殺されています。

「いったいなんてことをしてくれたんだ。大ばか者め。おまえなんか、地面にのみこまれてしまうがいい」

「あなた、つかまえたひつじを殺せといったじゃありませんか。ところで、あなた、怒

つていますね」

「いやいや、怒ってるんじゃない。ただ、おまえがひつじをぜんぶ殺したので、残念に思っているだけだ」

「それならいいんですよ」

こんなふうにして、弟は、主人の所で働き続けました。主人は、だんだんたえきれなくなってきました。けれども、今はまだ冬になったばかりです。約束の春までは、まだまだだいがまがありました。主人は、弟をだまして追い返そうと考えました。

ある日、主人は、おかみさんを森に連れて行っていました。

「おまえ、木の上でかっこうの鳴きまねをしてくれないか。そうしたら、あいつは、だまされて、春が来たと思うだろう」

おかみさんは、木に登りました。

主人は、家にもどって、弟に、森へ狩りに行こうとさそいました。ふたりが来てみると、

「カッコウ、カッコウ、カッコウ」と、かっこうが、大きな声で鳴いていました。主人は、

「おやおや、もう春になったんだ。おめでとう。おまえの働く期間は終わったよ」といいました。弟は、

「今は冬の真つ最中で、かっこうが鳴くはずがありません。いったいどんな鳥なのか、殺して調べようじゃありませんか」といって、鉄砲をかまえました。主人は弟に飛びかかっていいました。

「おまえみたいならず者は、悪魔に連れて行かれるがいい」

「おや、あなた、怒っていますね」

「当たり前だ。おれは怒っているんだ」

主人は、さげびました。

「さあ、二千ルーブル払ってやるから、とっとと行っちゃまえ。二度とおれの前にすがたを見せるな」

こうして弟は、二千ルーブルを手に入れました。そこから兄さんの借金の千ルーブルを主人に返して、家に帰って行きました。

人を穴におとしいれれば、自分もその穴に落ちてしまうものです。